

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2023年6月16日

踏まれても立ち上がらない雑草魂

夏がやって来ました。「夏と言えば（ ）である、の（ ）内に適切な語句を入れよ」という問題があったら、君は何をあてはめますか？海水浴、プール、キャンプ、花火、セミの声、扇風機、冷やし中華、スイカ、かき氷、ビール（・・・はないか）などいろいろな答えが出てくることでしょう。筆者が（ ）の中に入れるとしたら、上記に加えてもう一つ、「草取り」をあげます。筆者にとって夏の訪れは、雑草との仁義なき戦いの幕開けなのです。

この時期、あらゆる場所で雑草を目にします。筆者宅の狭い庭も例外ではありません。「雑草が目立ってきたな」と感じると草むしりをするのですが、2～3日して同じ場所を見ると、もう雑草が生え始めています。「キミたち、こんな狭い庭にチマチマ生えていないで、もっと向こうの広い公園とかでのびのびと生えてみたらどうなの？」と論（さと）してみるのですが、雑草たちは「いや～、アタシらにもアタシらのほうの事情があって生えているものだから・・・はい」となかなか言うことを聞いてくれません。

筆者の実家は、茨城県の北部、まわりを耕作放棄地に囲まれた典型的な現代日本の田舎にあります。こうした耕作放棄地や山林に生い茂る雑草は、筆者宅の庭先に生えているようなヒョロヒョロ雑草とはワケが違います。手でむしったりしては勝負になりません。休日などに、人間の叡智が生んだ文明の利器、刈払機を使って一気にやっつけるのですが、しかしその後、2～3週間して様子を見に行くと、なんとも新しい草がけっこうな長さ伸びているではないですか。「ワレワレわ～あ、人間たちの横暴と迫害に屈せず～う、刈られても刈られても、不屈の精神をもって立ち上がるのであ～る！」とシュプレヒコールを叫んでいる・・・かどうかは知りません。

『面白すぎて時間を忘れる雑草のふしぎ』稲垣栄洋著（王様文庫）を読みました。著者の稲垣さんには、静岡大学教授とならんで「みちくさ研究家」というふしぎな肩書きが記されています。

私たちは、庭先や道ばたに生えている草をひとくくりにして何気なく「雑草」と呼んでいます。しかし稲垣さんは「雑草という草はない」という言葉を引用し、雑草たちがそれぞれ持つ個性に注目していきます。そして、厳しい淘汰を経て苛酷な環境に適応して生きる雑草は「じつは選ばれた一部の成功者なのだ」と述べています。今回の校長室だよりは、雑草の話です。

『面白すぎて…』の第一章、「どんな雑草もポーッと生えてるわけじゃない」では、雑草たちが厳しい生存競争の中で生きている現実が説明されています。考えてみると、雑草は水やりも肥料もなしに、いたるところに生えて自分で成長していきます。人間の手で大切に育てられる農作物や観賞用の草花などとはえらい違いです。

稲垣さんは、植物の強さを三つの要素から説明しています。一つめは「競争に勝つ強さ」です。植物は、他の植物と常に日光や水を奪い合っています。その競争に勝った植物だけが、その地に繁茂することが可能になるのです。二つめは「耐える強さ」です。例えば水のない砂漠に生える植物にとって必要なのは、他の植物との競争力ではなく、ただじっと乾燥に耐える力だ、と説明されています。三つめは「変化を乗り越える強さ」。植物は、自分が生えている場所の環境が変化しても、動物のように別の場所に移動することができません。予測不能な変化に対応しなければ生きていけないのです。

読み進めていく中で、この三要素はなにも植物に限った話ではないのでは？と思いました。例えば人間社会の企業に置き換えてみると、まず企業は同業他社と競争して勝ち残ることが求められます。経済不況や業績不振を耐え忍ぶ力も必要です。企業を取り巻く社会情勢が変化したり技術革新があったりしたら、それに対応していかなければなりません。

雑草を一人の人間に置き換えた場合でも、この三要素は説明できそうです。「なーんだ、キミらもけっこう僕たちと同じなんだね」と、なんだか雑草に親近感を抱きました。

『面白すぎて…』では、さまざまな雑草をあげて、彼らがどのような戦略のもとに生存競争に勝ち残ってきたかを説明しています。その中で筆者がおもしろいなあ、と感じたものをいくつかピックアップして紹介したいと思います。『面白すぎて…』では、各植物にスケッチが添えられているのですが、筆者にスケッチは無理なので、植物名をググってもらって、「あーこの雑草、〇〇っていうんだ〜」と画像を確認しながら読んでいただければ幸いです。

コニシキソウ（トウダイグサ科トウダイグサ属）

「雑草魂」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。昭和のスポ根マンガ、スポ根アニメなどでは日常的に使用されてきましたが、スポ根ブームの衰退とともに使用頻度も激減し、現在では死語に近いかもしれません。恵まれた環境のもとスマートに成功を手にするエリートに対して、何度踏みつけられても負けずに立ち上がる忍耐力と根性の持ち主に対して、「あの人には雑草魂がある」などと使います。

ところが実際の雑草の中には、踏みつけられても立ち上がらないどころか、踏みつけられるまま地面に這いつくばって生きる仲間がいるといいます。思わず「雑草のくせに…立ち上がらんのかい?!」とツッコミのひとつも入れたくなる気もしますが、コニシキソウはそうした雑草のひとつです。

光合成を行う植物にとって「高さ」は重要です。光合成を行うためには太陽の光を浴びなければなりません。そのためには他の植物よりも高いところに葉をつけるのが有利です。逆に自分より背の高い草木に周囲を覆われてしまうと、植物は光合成を行えず成長できません。それでは、コニシキソウはどのようにしてわざわざ地面に這いつくばることを選択したの

でしょうか。

稲垣さんは「雑草にとってもっとも重要なことはなんだろう。それは、花を咲かせて種子を残すことである。そうであるとするれば、踏まれても踏まれても立ち上がるというのは、ずいぶん無駄な努力である。そんな余分なことにエネルギーを使うよりも、踏まれながら種子を残すことにエネルギーを注ぐ方が、ずっと合理的である」と述べています。コニシキソウが生えている場所は、人間などに踏まれやすい場所が多いといいます。そんな場所に生えるライバルの植物は少なく、たとえ生えて上に伸びたとしても踏まれて折られてしまうのが関の山です。コニシキソウはあえて「踏まれやすい」というデメリットのある場所を選択して他のライバルを排除し、地面に這いつくばることで踏まれたときのリスクを低減して、日光や水を独り占めして種子を残すという作戦をとっているのです。

ツメクサ (ナデシコ科ツメクサ属)

「涙の数だけ強くなれるよー、アスファルトに咲く花の一ようにー」という曲に聞き覚えのある人はいるでしょうか。スポ根とか、古い話ばかりで恐縮ですが、岡本真夜のデビュー曲「TOMORROW」(1995年)の冒頭の部分です。この歌詞には、何か悲しいことがあって泣いている人に対して、今は辛くてもその経験があなたを強くしてくれるよ、と励ます意味が込められています。それが「アスファルト(=辛く厳しい環境)に咲く花のよう」だということです。

アスファルトのひび割れに雑草が生えているのを見たことがあるでしょう。小さな花をつけていることもあります。「こんな場所にも、ちっぽけな花がけなげに咲いている。自分もがんばらなくっちゃ！」などと思ったことはないでしょうか。しかし、ちょっと待ってください。アスファルトのすき間は雑草にとって、本当に厳しい環境なのでしょうか？

『面白すぎて・・・』では、アスファルトのすき間に生える雑草のひとつとしてツメクサを紹介しています。「ツメクサ」で画像を検索してもらえば、必ず「ああ、あの草ね」となる、誰もが一度は目にしている雑草です。前述の通り、植物にとって最も大切なことは花を咲かせ、種子を残すことです。その点から考えたとき、アスファルトのすき間は雑草にとってけっして悪い場所ではない、と稲垣さんは述べています。

ツメクサのような小さな雑草は大きな雑草に比べて不利です。もしも隣に大きな雑草が生えて陰になったら十分に日光を浴びられません。しかし、アスファルトのすき間にうまく芽を出すことができれば、隣にはライバルとなる雑草はいません。思う存分日の光を浴びることができます。またこうした場所は、水を得やすいという利点もあります。道路にふった雨水はアスファルトのすき間に流れ込み、しかも一度流れ込んだ水は蒸発しづらいため、水も不足しにくいのです。

そしてアスファルトのすき間は、人間によって引き抜かれにくいという有利さもあります。草取りをしていてすき間の雑草を抜こうとしたら、葉っぱだけがちぎれて根が残ってしまった、という経験があるでしょう。根さえ残っていれば、雑草は再生できます。ツメクサのような雑草にとって、アスファルトのすき間は意外と快適な住まいなのかもしれません。

ナヅナ (アブラナ科ナヅナ属)

じつは雑草は育てるのが難しい、と稲垣さんは言います。人間に飼いや慣らされた野菜や草花は、土に蒔いて水をやれば決まった時期に芽を出します。しかし、放っておいても勝手に生えてくる雑草は、いざ育てようと種をまいても素直に芽を出すとは限らない“ひねくれ者”なのです。なぜ芽を出さないのか。それは雑草は芽を出すタイミングを自分で決めているからだと言います。

ナヅナは春の七草のひとつに数えられ、別名「ぺんぺん草」とも呼ばれる雑草です。ナヅナの種子は同じ時期に土に落ちたとしても、種子によって発芽の時期が異なります。早めに芽を出すものもあれば、後からゆっくり芽を出すものもあり、後から後からだらだらと発芽します。稲垣さんはこれをナヅナの「だらだら作戦」と呼んでいます。

ナヅナがある決まった時期に一斉に発芽しないのは、リスク分散を図るためです。もしも一斉に発芽をした場合、そのタイミングで草取りをされたり除草剤を撒かれたりしたらナヅナは全滅してしまいます。そのためナヅナはできるだけバラバラに発芽して、一部がダメになっても別の一部が生き残って種子を残す戦略をとっているのです。

稲垣さんによれば、ナヅナのように土の中で発芽のチャンスをうかがっている種子は「埋土種子（まいどしゅし）」と呼ばれ、埋土種子の集団は「シードバンク」、つまり種子の銀行と呼ばれるそうです。イギリスのコムギ畑の調査では、わずか1㎡あたりの土の中に7万5千粒の雑草の種子があった、とも書かれていました。

これを読んで、抜いても抜いても次から次へと生えてくる“奴ら”の秘密が少し分かりました。雑草が一筋縄でいかない手強い相手であることを改めて認識しました。

『面白すぎて・・・』には、他にも雑草の興味深い生き方がたくさん紹介されていたのですが、長くなるのでこのくらいにします。本のあとがきで稲垣さんは、過去の成功体験にこだわらず、環境や条件が変わればさまざまな生き方をして“子孫を残す”という目標を遂行していく雑草たちの、「雑」とは何かについて以下のように述べています。

「雑は整理されない力である。雑は枠に収まらない力である。雑は常識や思いこみに囚われない力である。雑は変化する力である。そして、雑は新しいものを生み出す力である。そうだとすると、今の時代にこそ「雑」はふさわしい」

AIの驚異的進歩、グローバリズム、気候変動問題、覇権主義と民主主義の対立、世界各地で発生する紛争や軍事的行動などさまざまな要因が未来を見通すことを困難にしている現代、そんな時代を生きていく私たちにとって、雑草のしたたかさに学ぶところは多いのではないかと、『面白すぎて・・・』を読んでそんな感想を抱きました。

今回の読書をきっかけにスマホに植物図鑑アプリを入れてみました。アプリを開いてカメラを植物にかざすとその名前が表示されます。しばらくのあいだ、庭の草花や道ばたの植物を相手に楽しめそうです。これまで雑草、雑草とひとくくりにしてきた彼らに個別の名前があること、そしてそれぞれが個性をもってたくましく生きていることを思うと、なんだか友情に似た気持ちすら覚えます。

しかし、だからといって我が物顔に不法侵入してくる雑草たちを黙って見過ごすわけにはいきません。秋の涼しい風が吹くころまで、雑草と筆者の熾烈（しれつ）な戦いはまだまだ続くのです。（To be continued.）

